巻頭言

観光と世界平和

ベルリンの壁が崩壊する少し前、誰しもまだまだ東西冷戦状態が続くと思っていた1988年10月、カナダのヴァンクーバーで、第1回「観光は平和への究極の力」世界大会 The First Global Conference：Tourism－A vital Force for Peace なる国際会議が開催された。「観光は平和へのパスポート」という古くからの願望表明にとどまらず、国際観光のより主体的な平和への貢献をアピールするための会議であった。

この会議では、観光と世界平和に関する様々な論議が行われ、多くの調査研究が紹介された。そのひとつに「平和」の定義に関する議論もあった。平和とは、とりあえず戦争や武力紛争がない状態を指し、隙あらば相手を倒そうと窺う敵対関係にあっても、最低限非戦闘の状態が保たれている状態である…。しかし、平和をより積極的にとらえれば、国家間、個人間に調和と安全の状態が保たれていること、すなわち友好的関係にある状態こそ真の平和というべきである…。前者の消極的平和は政治ないし安全保障のテーマであろう。そして、後者の積極的平和は市民レベルの国際交流なくしては醸成されず、まさしく国際観光の目標であり効果である、と。

この会議のために「観光と世界平和」と題する国際調査が行われた。これは、オーストラリア、カナダ、韓国、トルコ、英国、米国の6カ国の20～24歳の独身大学生を対象とするアンケート調査で、有効回答数1,064、うち60%が過去5年間に外国旅行の経験があった。観光が世界平和に貢献するかどうかを評価する変数としては、「観光は文化交流を促進すると思う」、「観光は異なる文化をもつ国民どうしの相互理解を促進すると思う」、「観光は世界平和を促進すると思う」の3つの記述が使われた。回答者の属性としては、1）観光産業についての教育訓練の有無、2）観光産業で仕事をした経験の有無、3）人種（国内で少数民族であるか否か）、4）外国語が話せるか、5）外国に居住する親類縁者がいるか、6）外国旅行の経験の有無、の6つを設定し、3変数への回答とのクロス集計をしている。

結果は、3変数のうち、「文化交流の促進」（肯定84%）、「国民相互の理解の促進」（同80%）の2つについては肯定の回答が圧倒的多数であったが、「世界平和の促進」については肯定53%、保留33%、否定13%と、他の2項目に比べて保留の回答が多かった。「世界平和の促進」への回答を属性別に見ると、観光産業の教育・訓練を受けたか働いた経験のある者は経験のない者より肯定回答が多く、また、外国語を話す者は話さない者より肯定度が高かった。しかし、一方で、外国を訪れた経験のある者は、経験のない者よりむしろ肯定度

が低く、保留の度合いが高いという結果が出た。調査担当者によれば、平和促進効果に保留回答が多かったのは、「平和」の定義を示さないまま問うたため、平和を非戦闘の状態と理解した人が多かった結果であり、外国旅行経験者に保留が多いのはマスツーリズムの反文化的な側面への批判を反映していると分析している。なお、各変数に対する国籍別回答に大きな差はなかった。

この国際会議開催の 1 年後にベルリンの壁が崩壊し、観光と世界平和の関わりを問う２回目の会議は開かれなかった。あのときから 15 年が過ぎ、想像もしなかった米英によるイラクへの武力侵攻が起こり、相互不信と憎悪を拡大再生産しつつ泥沼状態に陥っている。各地でテロが横行し、パレスチナにはまたしてもグロテスクな壁が築かれている。日々報じられる不幸な事件は、軍事力などのハードパワーは平和をますます遠ざけるだけであることを証明するものばかりである。

武力を前にして観光は無力に見える。しかし、もともと観光が平和の維持や促進に果たす力は間接的で、相手を傷つけるために振り上げた拳を下ろさせる力ではなく、拳を上げさせない力である。人種や文化や思想信条の違いを認めて友好的に共存することを教える力であり、仮に国家や政治勢力の論理が戦争を望んでも、それを押しとどめる市民レベルの平和への意思を育てることである。

第二次大戦が差し迫る前夜、東洋の知を西洋の知と対比して辛口の社会評論を書き続けた林語堂の次の言葉を改めて想起したい。「戦争をやめようと思うなら、諸国政府は 20 歳から 45 歳の国民を徴兵制度風に徴集し、10 年に一度ヨーロッパを旅行させて博覧会や何かを見物させてやるのがいいだろう。英国政府は再軍備計画に 50 億ポンドを投じているが、50 億ポンドといえば、全英国人をリビエラに旅行させるに足る金額である。ところが、戦費は必要だが旅行は贅沢だという反論が起こるにきまっている。だが私はその考えには賛成しかねる。旅行は必要だが、戦争は贅沢じゃないのか。」（講談社学術文庫『人生をいかに生きるか』上巻 p142）。

国際観光発展の歴史は、障壁としての見える国境、見えざる国境を軽減していく課程であった。イラクやアフガニスタンやパレスチナでテロや戦闘行為が終息して「消極的な平和」が訪れたとき、この地域に永続的な平和を維持するために観光が大きく貢献できる日がくることを願っている。

立教大学 観光学部
講師　石井　昭夫